

醜い家鴨の子

DEN GRIMME AELING

ハンス・クリスチャン・アンデルゼン Hans Christian Andersen

青空文庫

それは田舎いなかの夏なつのいいお天気てんきの日の事ことでした。もう黄金色こがねいろになつた小麦こむぎや、まだ青い燕あお麦からすむぎや、牧場ぼくじょうに積み上げあられたほしくさづみ乾草堆かんそうたいなど、みんなきれいな眺めながに見える日ひでした。こうのとりは長い赤い脚ながあかあしで歩きまわりながら、母親ははおやから教おそわつた妙みょうな言こと葉とばでお喋りしゃべりをしていました。

麦むぎ畑ばたけと牧場ぼくじょうとは大きな森もりに囲かこまれ、その真まん中なかが深ふかい水溜りみずだまになつています。全まったく、こういう田舎いなかを散歩さんぽするのは愉ゆ快かいな事ことでした。

その中なかでも殊ことに日当りひあたのいい場所ばしょに、川かわ近くちかく、気持きもちのいい古ふるい百姓家ひやくしやうやが立たつていました。そしてその家いえからずつと水際みずぎわの

辺りまで、大きな牛蒡の葉が茂っているのです。それは実際ずいぶん丈が高くて、その一番高いのなどは、下に子供がそつくり隠れる事が出来るくらいでした。人気がまるで無くて、全く深い林の中みたいです。この工合のいい隠れ場に一羽の家鴨がその時巢について卵がかえるのを守っていました。けれども、もうだいぶ時間が経っているのに卵はいつこう殻の破れる気配もありませんし、訪ねてくれる仲間もあまりないので、この家鴨は、そろそろ退屈しかけて来ました。他の家鴨達は、こんな、足の滑りそうな土堤を上って、牛蒡の葉の下に坐って、この親家鴨とお喋りするより、川で泳ぎ廻る方がよっぽど面白いのです。しかし、とうとうやつと一つ、殻が裂け、それから続いて、他

のも割われてきて、めいめいの卵たまごから、一羽わずつ生いき物ものがでて来きました。そして小ちいさな頭あたまをあげて、

「ピーピー。」

と、鳴なくのでした。

「グワツ、グワツってお言いい。」

と、母ははおや親おしが教おしえました。するとみんな一いつし生しょう懸けん命めい、グワツ、

グワツと真ま似ねをして、それから、あたりの青あおい大おおきな葉はを見廻まわすのでした。

「まあ、世せ界かいつてずいぶん広ひろいもんだねえ。」

と、子家あひるたち鴨鴨達は、今いままで卵たまごの殻からに住すんでいた時ときよりも、あたりがぐっとひろびろしているのを見みて驚おどろいて言いいました。すると母ははお

親やは、

「何なんだね、お前まえ達たちこれだけが全ぜん世界せかいだと思おもつてるのかい。まあそんな事ことはあつちのお庭にわを見てからお言いいよ。何なにしろ牧師ぼくしさんはたけほうつづの畑はたけの方ほうまで続つづいてるつて事ことだからね。だが、私わたしだつてまだそんな先さきの方ほうまで行いつた事ことがないがね。では、もうみんな揃そろつたろうね。」

と、言いいかけて、

「おや！ 一いち番ばん大おおきいのがまだ割われないでるよ。まあ一い体たいいつまで待またせるんだらうねえ、飽あき飽あきしちまつた。」

そう言いつて、それでもまた母は親おやは巢すに坐すわりなおしたのでした。

「今日こんにちは。御子おこさま様はどうかね。」

そう言いながら年とつた家鴨がやって来ました。

「今ねえ、あと一つの卵がまだかえらないんですよ。」

と、親家鴨は答えました。

「でもまあ他の子達を見てやって下さい。ずいぶんきりよう好し

ばかりでしょう？ みんな父親そっくりじゃありませんか。不

親切で、ちつとも私達を見に帰って来ない父親ですがね

」。

するとおばあさん家鴨が、

「どれ私にその割れない卵を見せて御覧。きつとそりや七面

鳥の卵だよ。私もいつか頼まれてそんなのをかえした事がある

けど、出て来た子達はみんな、どんなに気を揉んで直そうとして

も、どうしても水みずを恐こわがつて仕方しかたがなかった。私あたしあ、うんとガアガア言いつてやつたけど、からつきし駄目だめ！ 何なんとしても水みずに入いれさせる事ことが出来できないのさ。まあもつとよく見みせてさ、うん、うん、こりやあ間違まちがいなし、七面めんちよう鳥たまごの卵たまごだよ。悪いわることは言いわなから、そこに放ほつたらかしときなさい。そいで早はやく他ほかの子達こたちに泳およぎでも教おしえた方ほうがいいよ。」

「でもまあも少すこしの間あいだここで温あためていようと思おもいますよ。」
と、母ははおや親いは言いいました。

「こんなにもう今いままで長ながく温あためたんですから、も少すこし我慢がまんするのは何なんでもありませぬ。」

「そんなら御勝手ごかつてに。」

そう言い棄すてて年としより寄あひるの家鴨いは行いつてしまいました。

とうとう、そのうち大おおき卵たまごが割われてきました。そして、

「ピーピー。」

と鳴なきながら、雛ひな鳥はが匍はい出だしてきました。それはばかおほに大おおきく
て、ぶきりようでした。母はは鳥どりはじつとその子こを見みつめていまし

たが、突とつ然ぜん、

「まあこの子この大おおき事こと！　そしてほかの子ことちつとも似にてない
じやないか！　こりやあ、ひよつとすると七しち面めん鳥ちようかも知しれな
いよ。でも、水みずに入いれる段だんになりや、すぐ見み分わけがつから構かまや
しない。」

と、独ひとりごと言ことを言いました。

翌ある日ひもいいお天てん氣きで、お日ひ様さまが青あい牛ご蒨ぼうの葉はにきらきら射さし
 てきました。そこで母は鳥はどりは子こ供ども達たちをぞろぞろ水み際ぎわにつ連つれて
 来きて、ポシシヤンと跳とび込みました。そして、グワツ、グワツと鳴な
 いてみせました。すると小ちさい者もの達たちも真ま似ねして次つぎ々つぎに跳とび込
 むのでした。みんないつたん水みの中なかに頭あたまがかくれましたが、見み
 間まにまた出て来ます。そしていかにも易やす々やすと脚あしの下に水みを搔かき
 分わけて、見み事ごとに泳およぎ廻まわるのでした。そしてあのぶきりような子こ家あ
 鴨ひるもみんなと一いっしよに水みに入り、一いっしよに泳およいでいました。

「ああ、やつぱり七しち面めん鳥ちようじやななかつたんだ。」

と、母は親おやはい言いました。

「まあ何なんて上じよう手ずに脚あしを使う事ことつらら！ それにからだもちやん

と真まつ直すぐに立たててるしき。ありや間ま違ちがいなしに私わたしの子こさ。よく見みりや、あれだつてまんざら、そう見みつともなくないんだ。グワツ、グワツ、さあみんな私わたしに従ついてお出いで。これから偉えらい方かた々がたのお仲間なかま入いりをさせなくちゃ。だからお百ひやく姓しやうさんの裏庭にわの方かたがたたがたた紹しょう介かいするからね。でもよく気きをつけて私わたしの傍そばを離はなれちやいけないよ。踏ふまれるから。それに何なにより第だい一いちに猫ねこを用よう心じんするんだよ。」

さて一いち同どうで裏庭にわに着ついてみますと、そこでは今いま、大騒おおさわぎの真まつ最さい中ちゆうです。二ふたつの家か族ぞくで、一ひとつの鰻うなぎの頭あたまを奪うばいあつてい
るのです。そして結けつ局きよく、それは猫ねこにさらわれてしまいました。
「みんな御覽ごらん、世間せけんはみんなこんな風ふうなんだよ。」

と、母親ははおやは言いつて聞きかせました。自分じぶんでもその鰻うなぎの頭あたまが欲ほしかつたと見みえて、嘴くちばしを磨すりつけながら、そして、「さあみんな、脚あしに気きをつけて。それで、行儀ぎようぎ正ただしくやるんだよ。ほら、あつちに見みえる年としとつた家鴨あひるさんに上じようず手ずにお辞儀じぎおし。あの方かたは誰たれよりも生うまれがよくてス페인種しゆなのさ。だからい暮くらしをしておいでなのだ。ほらね、あの方かたは脚あしに赤あかいきれを結ゆわえつけておいでだろう。ありやあ家鴨あひるにとつちやあ大たいした名譽めいよなんだよ。つまりあの方かたを見失みうしわない様ようにしてみんなが気きを配くばつて証しようこ拠こなの。さあさ、そんなに趾あしゆびを内側うちがわに曲まげないで。育そだちのいい家鴨あひるの子こはそのお父とうさんやお母かあさんみたいに、ほら、こう足あしを広ひろくはなしてひろげるもんなのだ。さ、頸くびを曲まげて、グワツ

つて言つて御覧。」

家鴨あひるの子達こたちは言いわれた通とおりにしました。けれどもほかの家鴨あひる

達たちは、じろつとそつちを見みて、こう言いうのでした。

「ふん、また一ひと瞬かえり、他ほかの組くみがやつて来きたよ、まるで私達わたしたち

まだ足たりないか何なんぞの様ようにさ！ それにまあ、あの中なかの一羽わは何なん

て妙みちきりんな顔かおをしてるんだらう。あんなのこゝに入れてやる

もんか。」

そう言いつたと思おもうと、突とつ然ぜん一羽わ跳とび出だして来きて、それの頸くびの

ところを噛かんだのでした。

「何なにをなさるんです。」

と、母は親おやはどなりました。

「これは何にも悪い事をした覚えなんか無いじやありませんか。」
 「そうさ。だけどあんまり図体が大き過ぎて、見つともない面し
 てるからよ。」

と、意地悪の家鴨が言い返すのでした。

「だから追い出しちまわなきや。」

すると傍から、例の赤いきれを脚につけている年寄家鴨が、

「他の子供さんはずいみんみなきりよう好しだねえ、あの一羽
 の他は、みんなね。お母さんがあれだけ、もう少しどうにか善く

したらよさそうなもんだのに。」

と、口を出しました。

「それはとても及びませぬ事で、奥方様。」

と、ははおや母親ことたは答えました。

「あれはまった全くのところ、きりよう好よしではごさいませぬ。しかしまことよ誠に善せいしつい性質をもつておりますし、泳およぎをさせますと、他ほかの子こ達たちくらい、——いやそれよりずっと上じょうず手に致いたします。私わたしの考かんえますところではあれも日ひが経たちますにつれて、美うつくしくなりたぶんからだも小ちいさくなる事ことでございましょう。あれは卵たまごの中なかにあまり長ながく入はいつておりましたせいで、からだつきが普なみ通とに出来でき上あがらなかつたのでございませぬ。」

そう言いつて母ははおや親ことあひるは子家鴨こあひるの頸くびを撫なで、羽はねを滑なめらかに平たいらにしてやりました。そして、

「何なにしろおとここりや男おとこだもの、きりようなんか大たいした事ことじやないさ。

今いまに強つよくなつて、しつかり自分じぶんの身みをまもる様ようになる。」

こんな風ふうに呟つぶやいてもみるのでした。

「実じつ際さい、他ほかの子こ供ども衆しゆうは立り派っぱだよ。」

と、例れいの身み分ぶんのいい家鴨あひるはもう一度ど繰くり返かえして、

「ままずままず、お前まえさん方がたもつとからだをらくになさい。そしてね、
鰻うなぎの頭あたまを見みつけたら、私わたしのところに持もつて来きておくれ。」

と、附つけ足たしたものです。

そこでみんなはくつろいで、気きの向むいた様ようにふるまいました。

けれども、あの一ばん番ばんおしまいに殻からから出でた、そしてぶきりような

顔かお付つきの子こ家鴨あひるは、他ほかの家鴨あひるやら、その他たそここに飼かわれている鳥と

達たちみんなからまで、噛かみつかれたり、突つきのめされたり、いろ

「ああみんなは僕の顔があんまり変なもんだから、それで僕を怖
 がつたんだな。」

と、思いました。それで彼は目を瞑つて、なおも遠く飛んで行き
 ますと、そのうち広い広い沢地の上に来ました。見るとたくさん
 の野鴨が住んでいます。子家鴨は疲れと悲しみになやまされなが
 らここで一晩を明しました。

朝になつて野鴨達は起きてみますと、見知らない者が来てい
 るので目をみはりました。

「一體君はどういう種類の鴨なのかね。」

そう言つて子家鴨の周りに集まつて来ました。子家鴨はみんな
 に頭を下げ、出来るだけ恭しい様子をしてみせましたが、そう訊

ねられた事ことに対しては返答へんとうが出来できませんでした。野鴨のがもたち達は彼かれに向むかつて、

「君きみはずいぶんみつともない顔かおをしてるんだねえ。」
と、云いい、

「だがね、君きみが僕達ぼくたちの仲間なかまをお嫁よめにくれつて言いいさえしなけりや、まあ君きみの顔かおつきくらいいどんなだつて、こつちは構かまわないよ。」
と、つけ足たしました。

可哀かわいそうに！ この子家鴨こあひるがどうしてお嫁よめさんを貰もらう事ことなど考かんがえていたでしょう。彼かれはただ、蒲がまの中なかに寝ねて、沢地たくちの水みずを飲のむのを許ゆるされればたくさんだったのです。こうして二日ふつかばかりこの沢地たくちで暮くらしていますと、そこに二羽わの雁がんがやって来きました。それは

まだ卵たまごから出でて幾いく日も日ひの経たたない子雁こがんで、大たいそうこましやくれ者ものでしたが、その一いっ方ぽうが子家鴨こあひるに向むかつて言いうのに、

「君きみ、ちよつと聴きき給たまえ。君きみはずいぶん見みつともないね。だから僕ぼく達たちは君きみが気きに入いつちまつたよ。君きみも僕ぼく達たちと一いっ緒しょに渡わたり鳥どりにならないかい。ここからそう遠とくない処ところにまだほかの沢地たくちがあるがね、そこにやまだ嫁かたずかない雁がんの娘むすめがいるから、君きみもお嫁よめさんを貰もらうといいや。君きみは見みつともないけど、運うんはいいかもしれないよ。」

そんなお喋りしゃべりをしていますと、突とつ然ぜん空くう中ちゆうでポンポンと音おとがして、二羽わの雁がんは傷きずついて水みず草くさの間あいだに落おちて死しに、あたりの水みずは血ちで赤あかく染そまりました。

ポンポン、その音は遠くで涯はてしなくこだまして、たくさんの雁がん
 の群むれは一せいに蒲がまの中なかから飛び立ちました。音おとはなおも四方八しほうはつぱ
 方うから絶たえ間まなしに響ひびいて来きます。狩かりうど人がこの沢地たくちをとり囲かこ
 んだのです。中なかには木の枝えだに腰こしかけて、上うえから水草みずくさを覗のぞくのも
 ありました。獵りようじゆう銃うから出る青い煙けむりは、暗くらいい木の上うえを雲くもの様に
 立たちのぼりました。そしてそれが水すい上じようを渡わたつて向むこうへ消きえた
 と思おもうと、幾いく匹ひきかの獵りようけん犬いぬが水草みずくさの中に跳とび込こんで来きて、
 草くさを踏ふみ折おり踏ふみ折おり進すすんで行いきました。可かわい哀いそうな子家鴨こあひるがど
 れだけびつくりしたか！ 彼かれが羽はねの下したに頭あたまを隠かくそうとした時とき、一
 匹ひきのおお、怖おそろしい犬いぬがすぐ傍そばを通とおりました。その顎あごを大きおおく
 開ひらき、舌したをだらりと出だし、目めはきらきら光ひからせているのです。そ

して鋭い歯をむき出しながら子家鴨のそばに鼻を突つ込んでみた
 揚句、それでも彼には触らずにどぶんと水の中に跳び込んでしま
 いました。

「やれやれ。」

と、子家鴨は吐息をついて、

「僕は見つともなくて全く有難い事だった。犬さえ噛みつか
 ないんだからねえ。」

と、思いました。そしてまだじつとしていきますと、猫はなおもそ
 の頭の上ではげしく続いて、銃の音が水草を通して響きわたる
 のでした。あたりがすっかり静まりきつたのは、もうその日もだ
 いぶん晩くなつてからでしたが、そうなつてもまだ哀れな子家鴨

と、思いました。そしてまだじつとしていきますと、猫はなおもそ
 の頭の上ではげしく続いて、銃の音が水草を通して響きわたる
 のでした。あたりがすっかり静まりきつたのは、もうその日もだ
 いぶん晩くなつてからでしたが、そうなつてもまだ哀れな子家鴨

は動こうとしませんでした。何時間かじつと坐つて様子をみて
 いましたが、それからあたりを丁寧にもう一遍見廻した後やっ
 と立ち上つて、今度は非常な速さで逃げ出しました。畑を越え、
 牧場を越えて走つて行くうち、あたりは暴風雨になつて来て、
 子家鴨の力では、凌いで行けそうもない様子になりました。やが
 て日暮れ方彼は見すばらしい小屋の前に来ましたが、それは今に
 も倒れそうで、ただ、どっち側に倒れようかと迷つているために
 ばかりまだ倒れずに立つている様な家でした。あらしはますます
 つのる一方で、子家鴨にはもう一足も行けそうもなくなりま
 した。そこで彼は小屋の前に坐りましたが、見ると、戸の蝶
 番が一つなくなつていて、そのために戸がきつちり閉つていま

せん。下したの方ほうでちようど子家鴨こあひるがやつと身みを滑すべり込こませられるくらい透すいでいるので、子家鴨こあひるは静しずかにそこからのび入り、その晩ばんはそこで暴風雨あらしを避さける事ことにしました。

この小屋こやには、一人ひとりの女おんなと、一匹ぴきの牡猫おねこと、一羽わの牝鷄めんどりとが住すんでいたのでした。猫ねこはこの女御主人おんなごしゅじんから、

「せがれ
悴せがれや。」

と、呼よばれ、大だいの御ごひいき者ものでした。それは背せ中なかをぐいと高たかくしたり、喉のどをごろごろ鳴ならしたり逆ぎやくに撫なでられると毛けから火ひの子こを出だす事ことまで出来できました。牝鷄めんどりはというと、足あしがばかに短みじかいので

「ちんちくりん。」

と、いう綽名あだなを貰もらっていましたが、いい卵たまごを生うむので、これも女お

御主人おんしゅじんから娘むすめの様に可愛かわいがられているのでした。

さて朝あさになつて、ゆうべ入はいつて来た妙きみょうな訪問者ほうもんしゃはすぐ猫ねこ達たちに見みつけられてしまいました。猫ねこはごろごろ喉のどを鳴ならし、牝めんどり鶏どりはクツクツ鳴なきたてはじめました。

「何なんだねえ、その騒さわぎは。」

と、お婆ばあさんは部屋へや中じゅう見廻みまわして言いいましたが、目めがぼんやりしているものですから、子家鴨こあひるに気きがついた時とき、それを、どこかの家うちから迷まよつて来きた、よくふとつた家鴨あひるだと思おもつてしまいました。

「いいものが来きたぞ。」

と、お婆ばあさんは云いいました。

「牡家鴨おあひるでさえなけりやいいんだがねえ、そうすりや家鴨あひるの卵たまごが

てはい
手に入るといふもんだ。まあ様子を見ててやろう。」

そこで子家鴨は試しに三週間ばかりそこに住む事を許され

ましたが、卵なんか一つだつて、生れる訳はありませんでした。

この家では猫が主人の様にふるまい、牝鶏が主人の様に
威張つています。そして何かというとな

「我々この世界。」

と、言うのでした。それは自分達が世界の半分づつだと思つ
ているからなのです。ある日牝鶏は子家鴨に向つて、

「お前さん、卵が生めるかね。」

と、尋ねました。

「いいえ。」

「それじゃ何にも口出しなんかする資格はないねえ。」

牝鶏めんどりはそう云うのでした。今度は猫ねこの方が、

「お前さんまえ、背中せなかを高くしたり、喉のどをごろつかせたり、火の子ひこを出したり出来るかい。」

と、訊ききます。

「いいえ。」

「それじゃ我々われわれ偉い方々かたがたが何かものを言う時ときでも意見いけんを出だしちゃいけないぜ。」

こんな風ふうに言われて子家鴨こあひるはひとりで滅入めいりながら部屋へやの隅すみつこに小ちいさくなくなっていました。そのうち、温あたたかい日の光ひかりや、そよ風かぜが戸との隙間すきまから毎まい日にち入はいる様ようになり、そうなると、子家鴨こあひるはもう水みず

の上を泳ぎたくて泳ぎたくて堪らない氣持が湧き出して来て、とうとう牝鶏にうちあけてしまいました。すると、

「ばかな事をおいではないよ。」

と、牝鶏は一口にけなしつけるのでした。

「お前さん、ほかにする事がないもんだから、ばかげた空想ばつかしする様になるのさ。もし、喉を鳴したり、卵を生んだり出れば、そんな考えはすぐ通り過ぎちまうんだがね。」

「でも水の上を泳ぎ廻るの、實際愉快なんですよ。」
と、子家鴨は言いかえました。

「まあ水の中にくぐつてごらんなさい、頭の上に水が当る氣持のよさつたら！」

「氣持きもちがいいだつて！ まあお前まえさん氣きでも違ちがつたのかい、誰たれよりも賢かしこいここの猫ねこさんにでも、女御主人おんなごしゆじんにでも訊きいてごらんよ、水みずの中なかを泳およいだり、頭あたまの上うへを水みずが通とおるのがいい氣持きもちだなんておつしやるかどうか。」

牝めんどり鶏やつきは躍やつき氣きもちになつてそう言いうのでした。子家鴨こあひるは、

「あなたにや僕ぼくの氣持きもちが分わからないんだ。」

と、答こたえました。

「分わからないだつて？ まあ、そんなばかげた事ことは考かんがえない方ほうがいよ。お前まえさんここに居いれば、温あたたかい部屋へやはあるし、私達わたしたちからはいろんな事ことがならえるというもの。私わたしはお前まえさんのためを思おもつてそう言いつて上あげるんだがね。とにかく、まあ出で来るだけ速はやく卵たまごを

生む事や、喉を鳴す事を覚える様におし。」

「いや、僕はもうどうしてもまた外の世界に出なくちやいられない。」

「そんなら勝手にするがいいよ。」

そこで子家鴨は小屋を出て行きました。そしてまもなく、泳いだり、潜ったり出来る様な水の辺りに来ましたが、その醜い顔容のために相変わらず、他の者達から邪魔にされ、はねつけられてしまいました。そのうち秋が来て、森の木の葉はオレンジ色や黄金色に変つて来ました。そして、だんだん冬が近づいて、それが散ると、寒い風がその落葉をつかまえて冷い空中に捲き上げるのでした。霰や雪をもよおす雲は空に低くかかり、大

鳥すは羊齒しだの上うえに立たつて、

「カオカオ。」

と、鳴ないています。それは、一ひと目め見るだけだけで寒さむさに震ふるえ上あつてしままいそんな様よう子すでした。目めに入はいるものみんな、何なにもかも、子家鴨こあひるにとつては悲かなしい思おもいを増ますばかりです。

ある夕ゆう方がたの事ことでした。ちようどお日ひ様さまが今いま、きらきらする雲くもの間あいだに隠かくれた後のち、水み草ずくさの中なかから、それはそれはきれいな鳥とりのたくさんの群むれが飛とび立たつて来きました。子家鴨こあひるは今いままでにそんな鳥とりをまつた見みた事ことがまりませせんでした。それは白はく鳥ちようといとう鳥とりで、みまんな眩まばゆいほど白しろく羽はねを輝かがやかせながら、その恰かつ好こうのくび首くびを曲まげたりしてまいます。そして彼等かれらは、その立派りっぱな翼つばさを張はり拈ひろげて、こ

の寒い国からもつと暖い国へと海を渡つて飛んで行く時は、みんな不思議な声で鳴くのでした。子家鴨はみんなが連れだつて、空高くだんだんと昇つて行くのを一心に見ているうち、奇妙な心持で胸がいつぱいになつてきました。それは思わず自分の身を車か何その様に水の中に投げかけ、飛んで行くみんなの方に向つて首をさし伸べ、大きな声で叫びますと、それは我ながらびつくりしたほど奇妙な声が出たのでした。ああ子家鴨にとつて、どうしてこんなに美しく、仕合せらしい鳥の事が忘れる事が出来たでしょう！ こうしてとうとうみんなの姿が全く見えなくなる

と、子家鴨は水の中にぽつくり潜り込みました。そしてまた再び浮き上つて来ましたが、今はもう、さっきの鳥の不思議な気持ちに

すつかりとらわれて、我を忘れるくらいです。それは、さっきの鳥の名も知らなければ、どこへ飛んで行ったのかも知りませんでしたけれど、生れてから今までに会ったどの鳥に対しても感じた事のない気持ちを感じさせられたのでした。子家鴨はあのきれいな鳥達を嫉ましく思つたではありませんでしたけれども、自分もあんなに可愛らしかつたらなあとは、しきりに考えました。可哀そうにこの子家鴨だつて、もとの家鴨達が少し元氣をつける様にしてさえくれれば、どんなに喜んでみんなと一緒に暮らしたでしょうに！

さて、寒さは日々にひどくなつて来ました。子家鴨は水が凍つてしまわない様にと、しよつちゆう、その上を泳ぎ廻つていなけ

ればなりませんでした。けれども夜毎々々に、それが泳げる場所
 は狭くなる一方でした。そして、とうとうそれは固く固く凍つ
 てきて、子家鴨が動くときの水の中の氷がめりめり割れる様になつた
 ので、子家鴨は、すっかりその場所が氷で、閉ざされてしまわな
 い様力限り脚で水をばちやばちや搔いていなければなりませんで
 した。そのうちしかしもう全く疲れきつてしまい、どうする事も
 出来ずにぐったりと水の中で凍えてきました。
 が、翌朝早く、一人の百姓がそこを通りかかつて、この
 事を見つけたのでした。彼は穿いていた木靴で氷を割り、子家鴨
 を連れて、妻のところへ帰つて来ました。温まつてくるとこの可
 哀そうな生き物は息を吹きかえして来ました。けれども子供達

がそれと一いっしょ緒あそに遊あそぼうとしかけると、子家こあひる鴨ひるは、みんながまた
 何か自分なにじぶんにいたずらをするのだと思おもい込こんで、びつくりして跳とび
 立たつて、ミルクの入はいつていたお鍋なべにとび込こんでしまいました。そ
 れであたりはミルクだらけという始しまつ末つ。おかみさんが思おもわず手てを
 叩たたくと、それはなおびつくりして、今こんど度はバタの桶おけやら粉こな桶おけや
 らに脚あしを突つつ込こんで、また匍はい出だしました。さあ大たい変へんな騒さわぎで
 す。おかみさんはきいきい言いつて、火ひ箸ばしでぶとうとするし、子こども
 供たち達だもわいわいはしや燥つかまいで、捕つかまえようとするはずみにお互たがいにぶつ
 かつて転ころんだりしてしまいました。けれども幸さいわいに子家こあひる鴨ひるはうま
 く逃にげおおせしました。開ひらいていた戸との間あいだから出でて、やつと叢くさむらなの中なか
 まで辿たどり着ついたのです。そして新あらたに降ふり積つもつた雪ゆきの上うえに全まったく疲つか

れた身を横たえたのでした。

この子家鴨が苦しい冬の間に遭つた様々な難儀をすっかり

お話した日には、それはずいぶん悲しい物語になるでしょう。

が、その冬が過ぎ去つてしまつたとき、ある朝、子家鴨は自

分が沢地の蒲の中に倒れているのに気がついたのでした。それは、

お日様が温く照つているのを見たり、雲雀の歌を聞いたりして、

もうあたりがすっかりきれいな春になつているのを知りました。

するとこの若い鳥は翼で横腹を搏つてみましたが、それは全く

しつかりしていて、彼は空高く昇りはじめました。そしてこの翼

はどんどん彼を前へ前へと進めてくれます。で、とうとう、まだ

彼が無我夢中である間に大きな庭の中に来てしまいました。林檎

の木は今いつぱいの花ざかり、香わしい接骨木はビロードの様な
 芝生の周りを流れる小川の上にその長い緑の枝を垂れています。
 何もかも、春の初めのみずみずしい色できれいな眺めです。この
 とき、近くの水草の茂みから三羽の美しい白鳥が、羽をそ
 よがせながら、滑らかな水の上を軽く泳いであらわれて来たので
 した。子家鴨はいつかのあの可愛らしい鳥を思い出しました。そ
 していつかの日よりもっと悲しい気持ちになってしまいました。
 「いつそ僕、あの立派な鳥んとこに飛んでつてやろうや。」
 と、彼は叫びました。

「そうすりやあいつ等は、僕がこんなにもつともない癖して自
 分達の傍に来るなんて失敬だつて僕を殺すにちがいない。だ

けど、その方がいいんだ。家鴨の嘴で突かれたり、牝鶏の羽でぶたれたり、鳥番の女の子に追いかけられるなんかより、どんなにいいかしれやしない。」

こう思ったのです。そこで、子家鴨は急に水面に飛び下り、美しい白鳥の方に、泳いで行きました。すると、向うでは、この新しくやって来た者をちらつと見ると、すぐ翼を拡げて急いで近づいて来ました。

「さあ殺してくれ。」
と、可哀そうな鳥は言つて頭を水の上に垂れ、じつと殺されるのを待ち構えました。

が、その時、鳥が自分のすぐ下に澄んでいる水の中に見つけた

ものは何なんでしたらう。それこそ自分じぶんの姿すがたではありませんか。けれどもそれがどうでしょう、もう決して今いまはあのくすぶつた灰色はいいろの、見るみのも厭いやになる様ような前まえの姿すがたではないのです。いかにも上じょう品ひんで美しい白鳥はくちようなのです。百姓ひやくしやう家の裏庭にわで、家鴨あひるの巢すの中なかに生れうまようと、それが白鳥はくちようの卵たまごから孵かえる以上いじよう、鳥とりの生れうまつきには何なんのかかわりもないのでした。で、その白鳥はくちようは、今いまとなつてみると、今いままで悲かなしみや苦くるしみにさんざん出遭であつた事ことが喜よろこばしい事ことだつたという気持きもちにもなるのでした。そのためにかえつて今自分いまじぶんと困かこんでいる幸福こうふくを人一倍ひとばいたの樂ことしむ事ことが出来できるかです。御覽ごらんなさい。今いま、この新あたしく入はいつて来た仲間なかまを歡迎かんげいするしるしに、立派りつぱな白鳥はくちよう達たちがみんな寄よつて、めいめいの嘴くちばしで

その頸くびを撫なでてゐるではありませんか。

幾いくにん人かの子供こどもがお庭にわに入はいつて来きました。そして水みずにパンやお菓子かしを投なげ入いれました。

「やつ！」

と、一いちばんちい番こ小さい子こが突とつぜん然おおごえ大だ声こゑを出だしました。そして、

「新あたらしく、ちがったのが来きてるぜ。」

そう教おしえたものでしたら、みんなはおおよろこ大お喜よろこびで、お父とうさんやお母かあさんのところへ、雀こおどり躍おどしながら馳かけて行いきました。

「ちがった白はくちよう鳥あたらがいまーす、新あたらしいのが来きたんでーす。」

口くちぐち々にそんな事ことを叫さけんで。それからみんなもつとたくさんのパンやお菓子かしを貰もらつて来きて、水みずに投なげ入いれました。そして、

「あたらしいのが一等きれいだね、若くてほんとにいいね。」
 と、賞めそやすのでした。それで年の大きい白鳥達まで、この新しい仲間の前でお辞儀をしました。若い白鳥はもうまったく気まりが悪くなつて、翼の下に頭を隠してしまいました。彼には一体どうしていいのか分らなかつたのです。ただ、こう幸福な気持でいっぱいで、けれども、高慢な心などは塵ほども起しませんでした。

見つともないという理由で馬鹿にされた彼、それが今ほどの鳥よりも美しいと云われているではありませんか。接骨木までが、その枝をこの新しい白鳥の方に垂らし、頭の上ではお日様がかがやくように輝かしく照りわたっています。新しい白鳥は羽をさらさら鳴

らし、細ほつそりした頸くびを曲まげて、心こころの底そこから、
「ああ僕ぼくはあの見みつともない家鴨あひるだった時とき、実じつ際さいこんな仕し合あせ
なんか夢ゆめにも思おもわなかつたなあ。」
と、叫さけぶのでした。

青空文庫情報

底本：「小學生全集第五卷 アンデルゼン童話集」興文社、文藝春秋社

1928（昭和3）年8月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、次の書き換えを行いました。

「或↓ある 余り↓あまり 一向↓いっこう 一旦↓いったん
中↓うち 彼↓か 却つて↓かえつて かも知れない↓かもしれ
ない 位↓くらい 此処↓ここ 此の↓この 随分↓ずいぶん

直ぐ↓すぐ 其処↓そこ 其・其の↓その 其中↓そのうち 大
分↓だいぶ・だいぶん 沢山↓たくさん 唯↓ただ 多分↓たぶ
ん 為↓ため 段々↓だんだん 丁度↓ちようど 一寸↓ちよつ
と て居る↓ておる 何↓ど 何処↓どこ 兎に角↓とにかく
程↓ほど 益々↓ますます 又↓また 迄↓まで 間もなく↓ま
もなく 余つぽど↓よつぽど」

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

醜い家鴨の子

DEN GRIMME AELING

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>